

鞆ヶ浦道 港湾

石見銀山の銀鉱は、**1527** 年に商人の神谷寿貞が付近の沿岸を航行中に陽の光に輝く山の頂に気付いたことから、発見されたと伝えられています。博多南部の街（現在の福岡）に本拠を構えていた神谷は、この地を支配していた大内氏にその事実を報告しました。大内氏はすぐさま、この“富の山”を支配下に収めました。石見銀山で採掘された鉄鉱石を博多へ運び、さらに朝鮮半島に輸送して精製を行うために、最も近く、適した入り江である鞆ヶ浦に大内氏は港を設け、日本海の荒波や厳しい北風からの防御を図りました。大内氏は、石見銀山からこの港までの間に **7.5** キロメートルの道を整備し、丘陵地帯を越える土橋を建設し、重い荷物の運搬に適した道をつくりました。しかし、この努力が報われたのは **30** 余年の間にすぎず、**1562** 年に大内氏は敵対する毛利氏に石見銀山を明け渡し、鞆ヶ浦を放棄して別の港へと移ったのです。現地の住民は、再び漁業や農業に従事するようになり、今でもこの地では多くの人々がこれらの仕事を生業としています。鞆ヶ浦の最盛期を偲ばせる存在として、海岸沿いに突き出た岩石層は、柔らかい石を削って作られたものであり、大内氏の銀船の係留装置として利用されました。